メキシコの美術、文化知って

岡山県立大・真世土マウ准教授講演

風音

リベラにオロスコ、シケイロス―。岡山県立美術館（岡山市北区天神町）の特別展「名古屋市美術館コレクション　エコール・ド・パリとメキシコ・ルネサンス」に並ぶ作品を紹介しながら、「日本ではなじみが薄いが、メキシコを代表する作家ばかり。岡山の人に知ってもらえるのはうれしい」と話したのは、真世土マウ・岡山県立大准教授（53）＝写真。同展にちなみ、母国の美術や文化について講演した。

首都メキシコ市で生まれ育ち、大学卒業後の1994年に来日。金沢美術工芸大大学院で工芸デザインを学び、工芸工房勤務などを経て、2014年に岡山県立大に赴任した。専門は工芸デザインで、古代アメリカ土器を研究している。

メキシコ・ルネサンスは、農民解放などを目指した民主革命後の1920年代に起こった絵画運動。民族のアイデンティティーを確立すべく、建国の歴史を主題にした大きな壁画が次々と制作された。「当時は字が読めない国民も多く、絵画が果たした役割は大きかった」

会場では骸骨や葬列を描いた絵画が目を引く。どこか陽気でユーモラスな印象を受けるのは「メキシコでは古代から死は恐れるものではなく、身近で大切なもの」とし、有名な「死者の日」は「日本の盆に当たる祝祭だ」と解説した。

日本国籍を取得し岡山市に居を移してからは、ＢＩＺＥＮ中南米美術館（備前市）が所蔵する古代アンデスの「笛吹きボトル」の構造解析、再現に取り組むなど、地域と連携した活動にも積極的だ。「中南米の文化を岡山に発信していけたら」

特別展は山陽新聞社など主催。３月12日まで、月曜休館。（平松隆）

（Ｃ）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。